

唐崎神社

唐崎は琵琶湖の西岸にある小さな岬で、667年から672年まで朝廷が置かれた場所に近い。De 伝承によると、ある日、三輪（現在の奈良県）からやってきた大己貴神が釣り船でこの地に降り立った。そして、唐崎に住む流浪人・ことのみたちうしまるに適切な住処はないかと尋ねた。うしまるは、波の音が涅槃経の一節のように聞こえることを告げた。そこで大海原に出て波の音を聞いてみると、大きな松の木の上に舟が飛び上がった。この奇跡を見たうしまるは、大海人皇子が比叡山に適切な場所を見つけ、そこに自分もついていき祠を建て、神官となることを提案した。うしまるが建てたお堂は、比叡山で初めて神を祀る建造物であった。比叡山には他にも神が宿っていると信じられていたが、それらは大きな岩や木など自然のものに祀られていた。その後、1400年の間に何度も建て替えられ、現在は西本宮の本殿と日吉大社の社殿の一部になっている。

唐崎神社は、692年に唐崎の岬に創建された神社である。日吉大社とは別の神社だが、日吉大社創建のきっかけとなった神の啓示を受けた場所であり、特別な関係にある。

唐崎神社は、うしまるの妻であるわけすきひめのみことを祀っている。婦人病や性病を治すことで知られる。境内では、4月の3日間の山王祭を締めくくる行事のひとつが行われる。日吉大社の7基の神輿が舁（はしけ）で唐崎神社に運ばれ、大己貴（おおなむち）の降臨を再現する。

神社の裏手には、ひときわ目を引く松の木が立っている。この松は、大己貴がうしまるに語りかけた松の三代目の子孫といわれている。唐崎の松は、万葉集の歌や松尾芭蕉（1644-1694）の句など、日本の美術や詩の中に登場する。芭蕉の二代目松の句は、石碑に刻まれ、現在の松の木のそばに掲げられた木札にも記されている。また、歌川広重（1797-1858）の代表的な近江八景のひとつにも二代目の木が選ばれている。